

知る  
ことが  
力になる

第1回

車いすフェンシング

写真・文 清水一二

仲間に恵まれて20年  
「年を重ねても続けたい」



小松さんの指導を受ける櫻井さん

1992年、神戸で極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会（フェスピック）が行われた。そのときのフェンシング競技で使われたピスト（試合台）が、京都市障がい者スポーツセンターに設置されたのを機に、「障がい者の車いすフェンシング教室」が開催されることになった。

進行性股関節変形症のため、歩行がしにくくなった櫻井貞子さんは、そのころ同センターで車いすテニスや水泳などをしており、車いすフェンシング教室にも興味を持った。

フェンシング教室の講師として、当時の京都フェンシング協会の理事長から白羽の矢を立てられたのが、現在のNPO法人日本車いすフェンシング協会理事長・小松真一氏（小松氏は日本人選手を引き連れ、パラリンピックシドニー大会とアテネ大会にも参戦した人物だ）。

コマーシャル写真を撮るカメラマンだった櫻井さんと、京都市内に写真館をかまえるカメラマンである小松さんは以前からの顔見知り。予想外の場での再会で意気投合。櫻井さんは小松さんから本格的に車いすフェンシングのトレーニングを受けるようになり、20年以上この競技を楽しんでいる。

「仲間に恵まれて楽しくてしょうがない」「年をとっても続けられる競技」と車いすフェンシングがお気に入り。今はNPO法人日本車いすフェンシング協会の理事も務めている。



車いすフェンシング

基本的にフェンシングとルールや用具は同じ。種目も剣の長さにより「フルール」「エペ」「サーブル」がある。もっとも異なるのが試合台となる「ピスト」。競技者の腕の長さに合わせて車いすをピストに固定し、上半身だけで闘う。1960年ローマパラリンピックから正式競技に。欧州では盛んな競技。

清水一二（しみず かずじ）

1954年横浜市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、神奈川リハビリテーションセンター写真室に勤務。そこで障害者のスポーツと出会う。1980年フリーカメラマンに。30年以上にわたり障害者スポーツを撮り続けている。

